

第2章 ボイラータンク地点（1998年度立会）

第1節 調査の概要

1. 調査に至る経緯

1998年度、蔵本キャンパスの南東部に位置する地点に、ボイラータンクを設置することとなった。それまでの調査で、設置予定地の西側では、弥生時代前期の用水路や中期後半の方形周溝墓（第13次調査地点）、弥生時代前期前葉～中葉の大溝（第15次調査地点）などが検出されていた。そのため、これらに關係する遺構・遺物が、予定地の範囲まで広がっている可能性を想定し得た。そこで1999年1月、土地掘削に際し、調査員1名による立会調査を実施した（図2-1）。調査面積は約81㎡である。



図2-1 作業風景

2. 調査体制

調査主体 徳島大学埋蔵文化財調査委員会（委員長・齋藤史郎〔徳島大学長〕）

調査担当 徳島大学埋蔵文化財調査室（室長・北條芳隆）

調査員 北條芳隆（総合科学部助教授）

調査補助 鄭仁盛（総合科学部留学生）

3. 調査地点の位置

本調査地点は、徳島大学蔵本キャンパスの南東部に位置する（図2-2）。この地点のすぐ西側では、弥生時代前期前葉～中葉の墓を含む土坑（第22次調査地点）などが、さらに北西側から西側にかけての地帯では、弥生時代前期の用水路（第13次調査地点）、弥生時代前期前葉～中葉の大溝（第15次調査地点）、弥生時代前期中葉の畑跡や用水路（第20次調査地点）などが検出されている。このように、本調査地点の周辺は、弥生時代前期において、墓域・居住域・生産域といった人間活動の痕跡が密集する地帯であり、とくに本調査地点は、第22次調査地点とともに、当時の墓域に位置するものと考えられる。

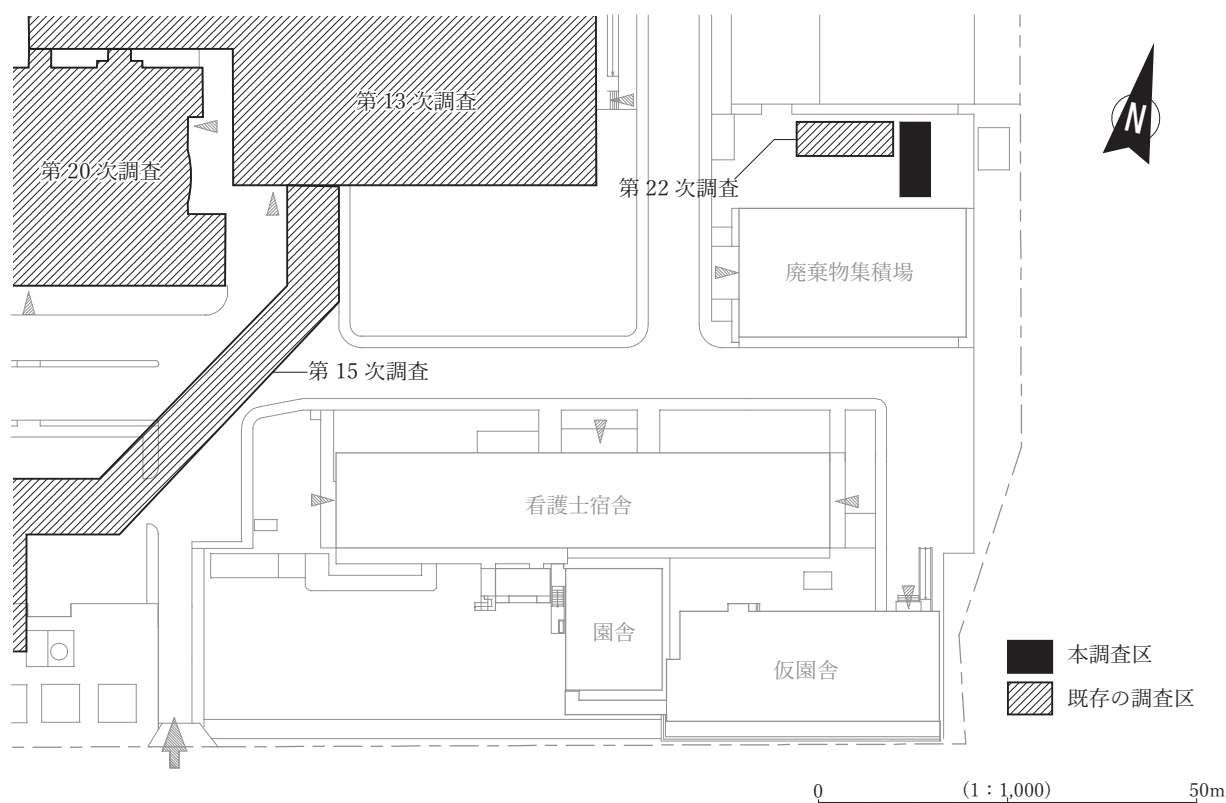


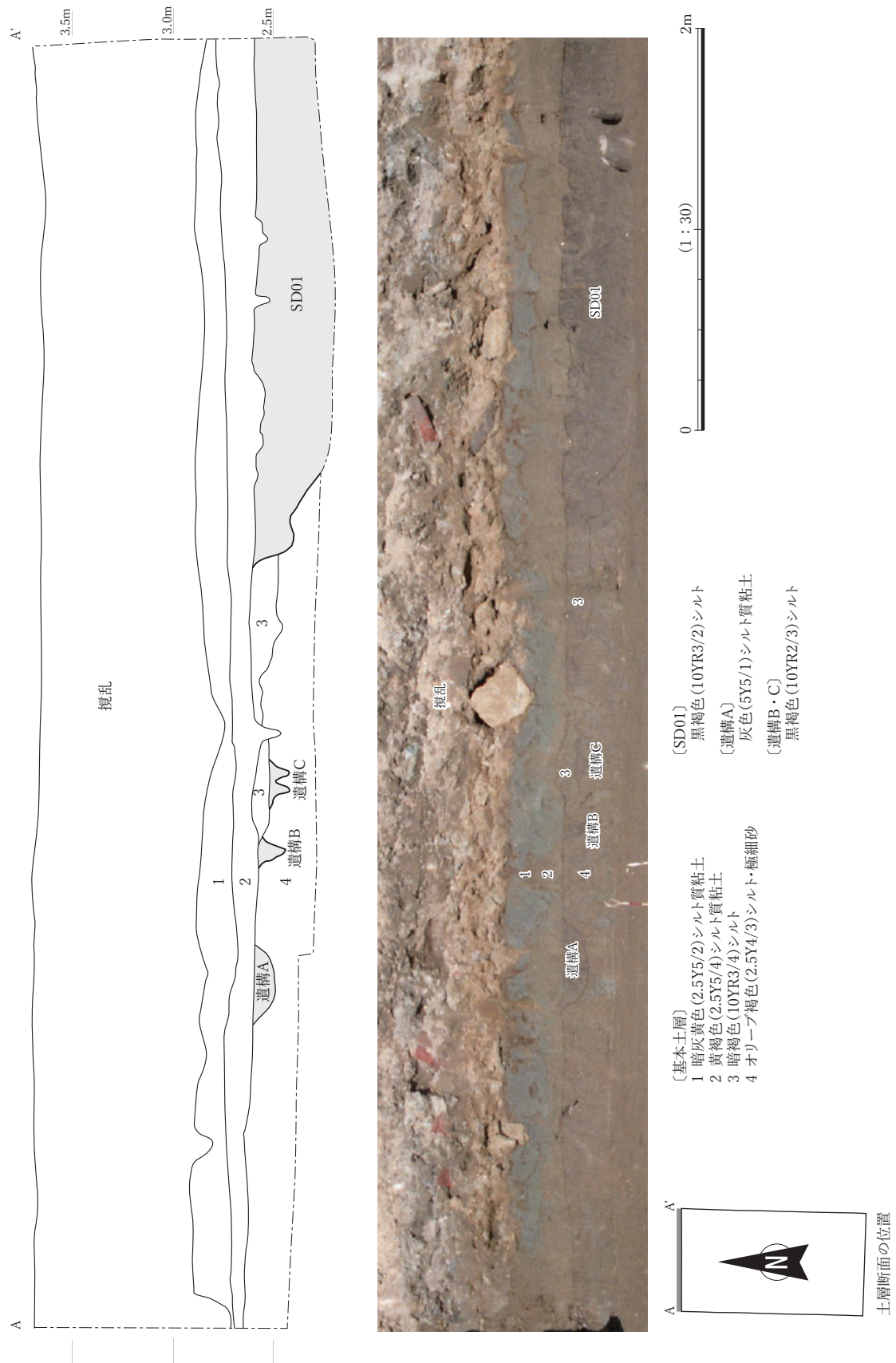
図 2-2 本調査地点の位置

第2節 調査の記録

1. 基本層序

本調査地点の基本土層は5層に分けられる。以下、調査区北壁・東壁の土層断面（図 2-3・4）にもとづいて詳述する。各層の形成時期については、出土遺物が少なく決め手を欠いたため、周辺地点の調査記録を参照した。なお、現地表面は標高約 3.75m であり、そこから標高 2.8 ～ 2.95m 辺りまでは近代以降の攪乱を受けていた。

- 1層 暗灰黄色（2.5Y5/2）シルト質粘土からなる。上面の標高は 2.8 ～ 2.95m、厚さは 3 ～ 23 cmを測る。近世の水田層と考えられる。
- 2層 黄褐色（2.5Y5/4）シルト質粘土からなる。上面の標高は 2.7 ～ 2.8m、厚さは 10 ～ 20 cmを測る。中世～近世の水田層かと思われる。
- 3層 暗褐色（10YR3/4）シルトからなる。上面の標高は約 2.6m、厚さは 3 ～ 17 cmを測る。弥生時代前期末～中世の土壌化層と考えられる。
- 4層 オリーブ褐色（2.5Y4/3）シルト・極細砂からなる。上面の標高は 2.6 ～ 2.65m、厚さは 28 ～ 35 cmを測る。弥生時代前期末の洪水砂層と考えられる。
- 5層 にぶい黄褐色（10YR4/3）細砂・シルトからなる。上面の標高は約 2.3m である。弥生時代前期中葉の洪水砂層と考えられる。



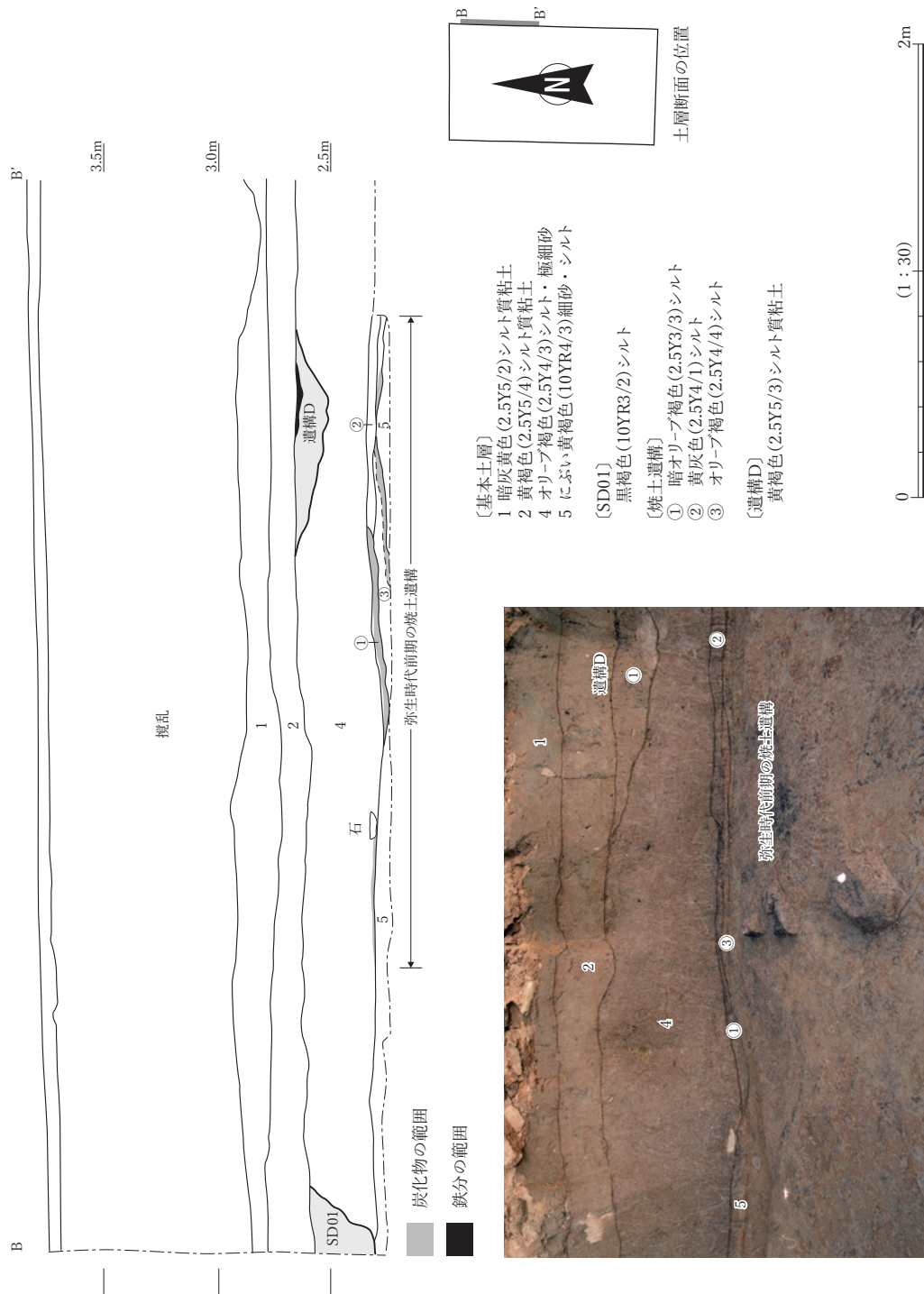


図 2-4 調査区東壁土層断面

本調査地点では、4層中位～下位を遺構面として、遺構を検出した。

2. 遺構と遺物

本調査地点では、弥生時代前期に属する墓2基、土坑2基、焼土遺構1基、溝3条が調査された（図2-5・6）。以下、遺構の種類ごとに詳述する。

（1）墓

SX01（図2-7～9）

調査区の南側で検出された石棺墓である。大半が攪乱を受け、失われているが、墓壙の平面形は本来、長方形であったものと推定され、検出面で長さ1.28m、幅0.98m、底面で長さ1.09m、幅0.75mを測る。墓壙の断面形は長軸・短軸ともに、逆台形状を呈し、深さ0.50mを測る。石棺は、板状あるいは横長の石を2～3段積み上げて構築されている。石を横積みした北側の長壁とは異なり、西側の短壁は板状の石を立てて造られている。石棺に使われた石材はすべて、遺跡の南側に位置する眉山周辺で採取しうる緑色片岩である。長壁の東側上部には、蓋石の一部が残存していた。石棺底の内法は長さ0.95m、幅0.37mを測る。長軸方向はN70°Eである。遺物は出土しなかった。人骨は出土しておらず、石棺の残存状態も良くないことから、頭位を推定することはできない。なお、第6次調査地点では、これに類似する構造をもつ「石棺墓1」（徳大埋文、1998）が検出されている。報告では、積石からなる構造物を、遺体を直接収納する石棺とみなしているが、これとは異なり、内部に木棺を有する「石槨墓」とみなす見解（橋本、2001）がある。本遺構は、長壁・短壁のいずれの床面にも、掘り込みを有する。この特徴は、石槨墓ではなく、石棺墓に認められるものである。ここではこの遺構を石棺墓と判断した。遺物は出土しなかったが、検出層位と第6次調査地点での検出例からみて、本遺構の時期は、弥生時代前期前葉～中葉の可能性を考えておきたい。

SX02（図2-10～14、図版1）

調査区の南側で検出された土壙墓である。SX01の北西に位置する。墓壙の平面形は、検出面で隅丸長方形を呈し、長さ1.61m、幅0.72mを測る。底面で長楕円形に近い隅丸長方形を呈し、長さ0.92m、幅0.47mを測る。墓壙内の南側にはテラス状の段がある。墓壙の断面形は、長軸でやや不整な舟形、短軸でU字形を呈する。深さは0.59mを測る。埋土は7層に分けられるが、粗砂からなる3・6層を除いて、シルト層が主体をなしている。炭化物を含む7層、炭化物を多量に含む6層が堆積した後、上位の層がU字形をなして堆積している。墓壙の北側からは緑色片岩製の板石（長さ70cm×幅45cm×厚さ16cm）が検出された。この石は層位学的には、5層と6層の間に位置づけられる、炭化物を多量に含む6層を木蓋の痕跡ととらえるならば、腐朽しつつあった木蓋が、押さえ石とみられる板石の重量に耐えきれず崩壊し、それより上位にあった土もろとも墓壙内に埋没したものとみなせようか。こうした解釈が妥当であるならば、本遺構は木蓋土壙墓ということとなろう。長軸方向はN6°Wである。板石が頭位に置かれたものだとすれば、頭位は北であろうか。遺物は弥生土器の壺や甕の破片と打製石斧が出土した。出土層位からみて、これらは遺体を墓壙内に収納し、木蓋と石で閉塞した後、

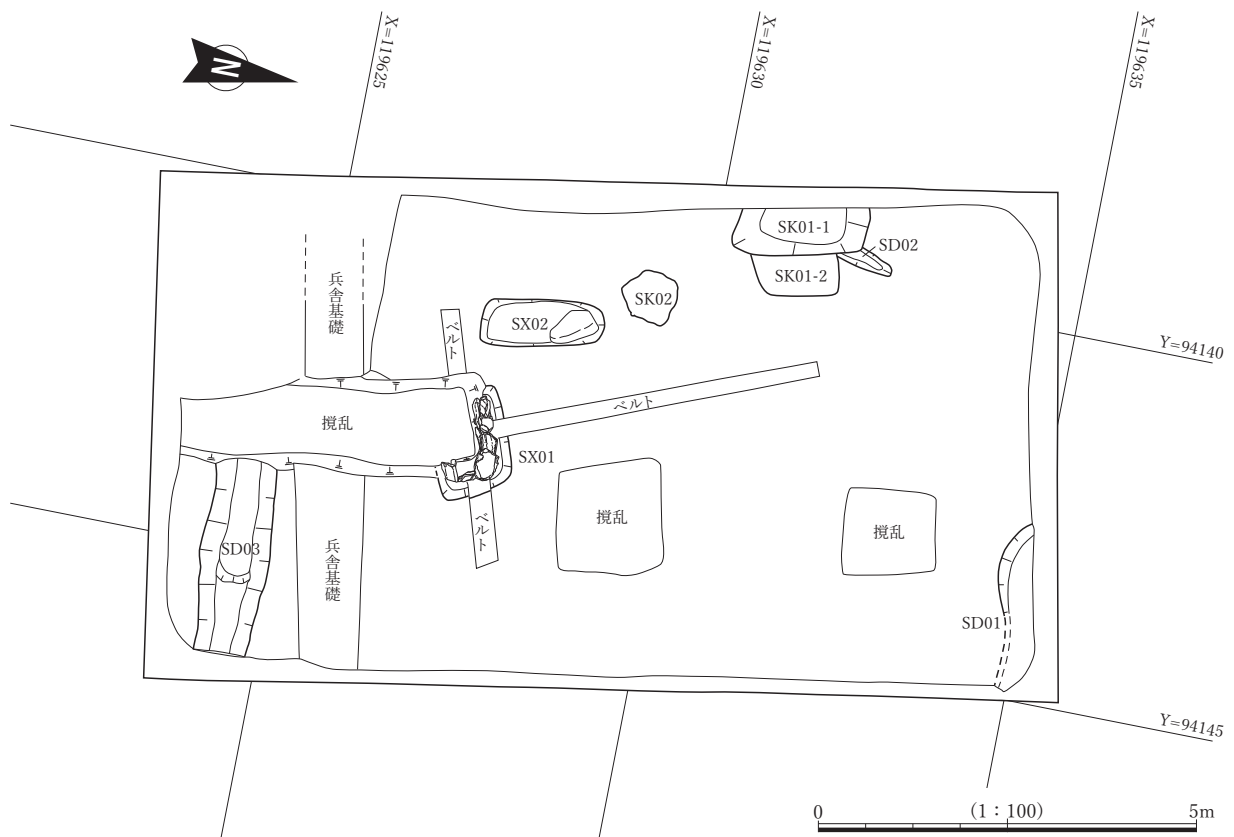


図 2-5 検出遺構全体図

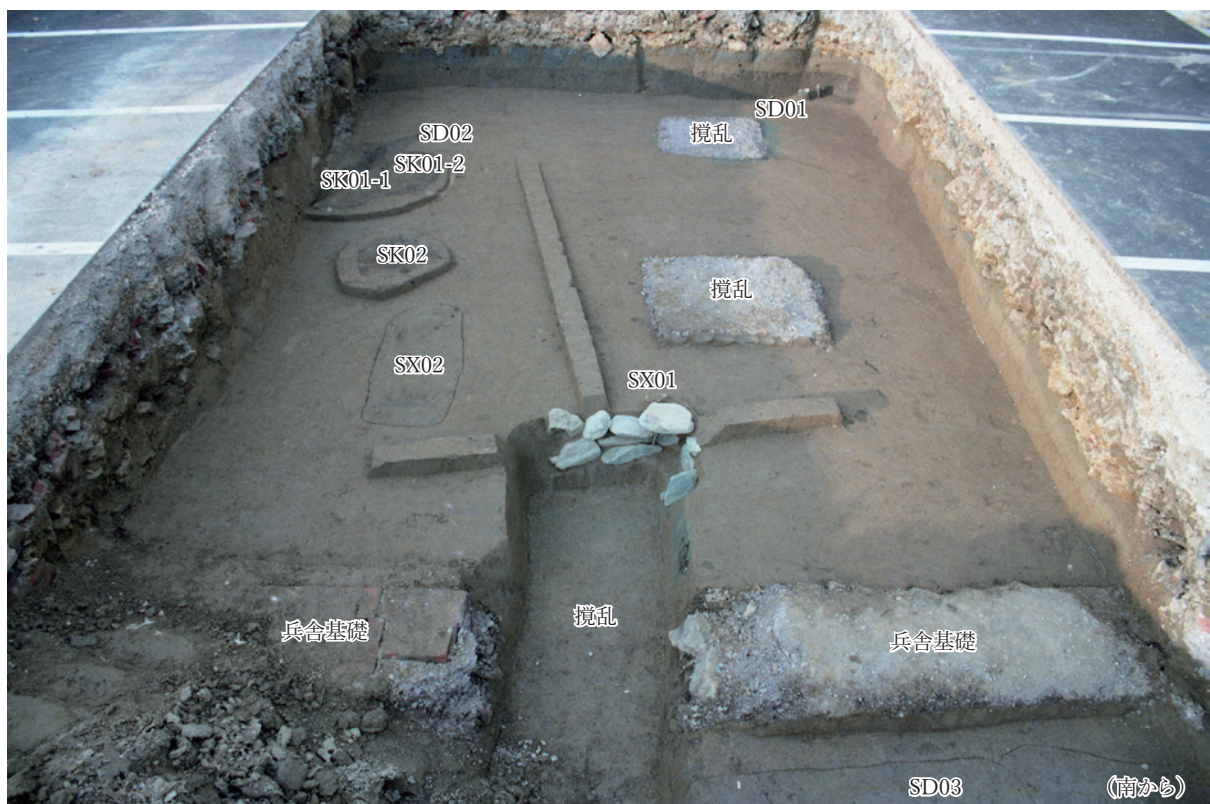


図 2-6 遺構検出状況

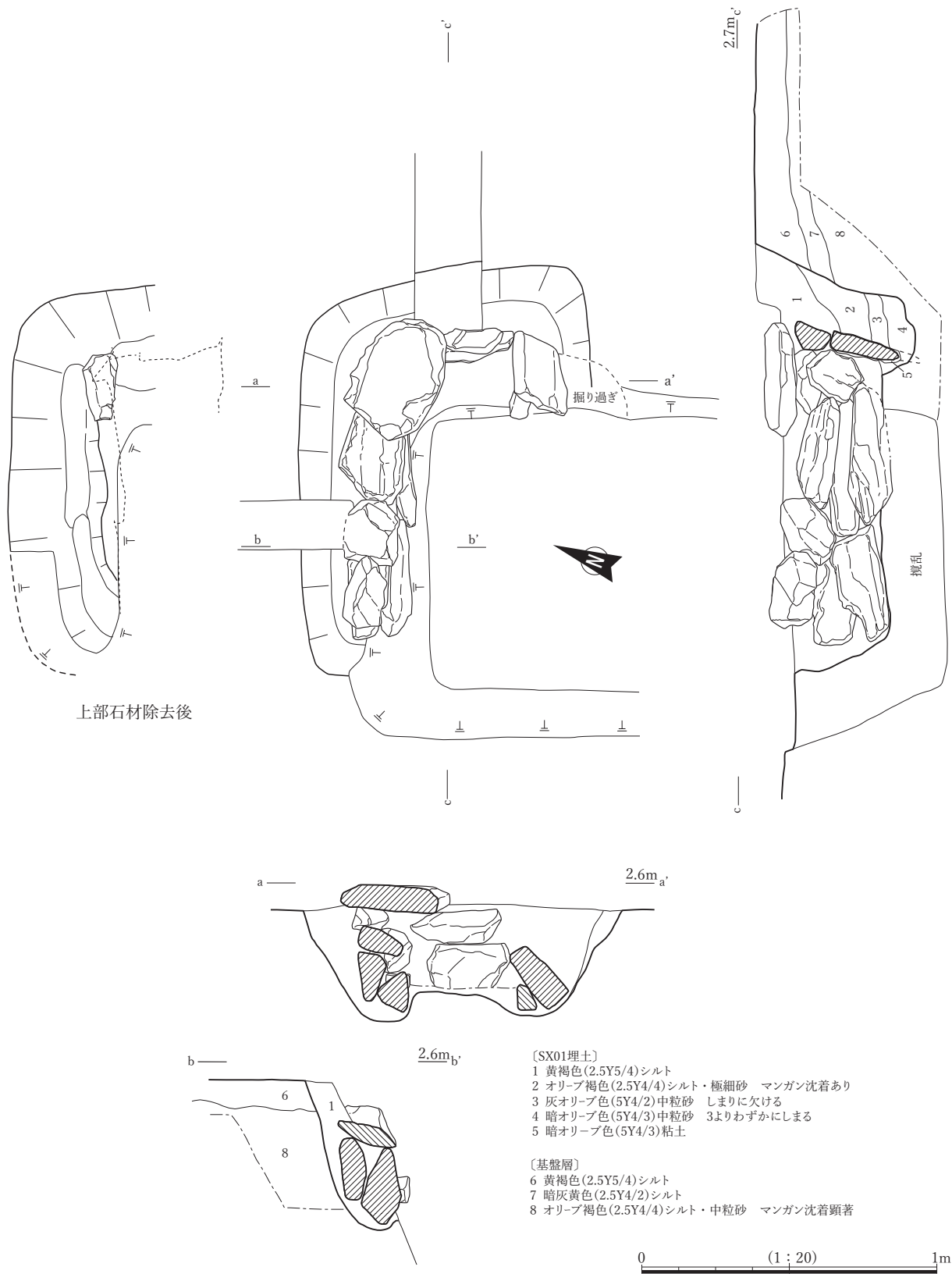


図 2-7 SX01 (1)



図 2-8 SX01 (2)

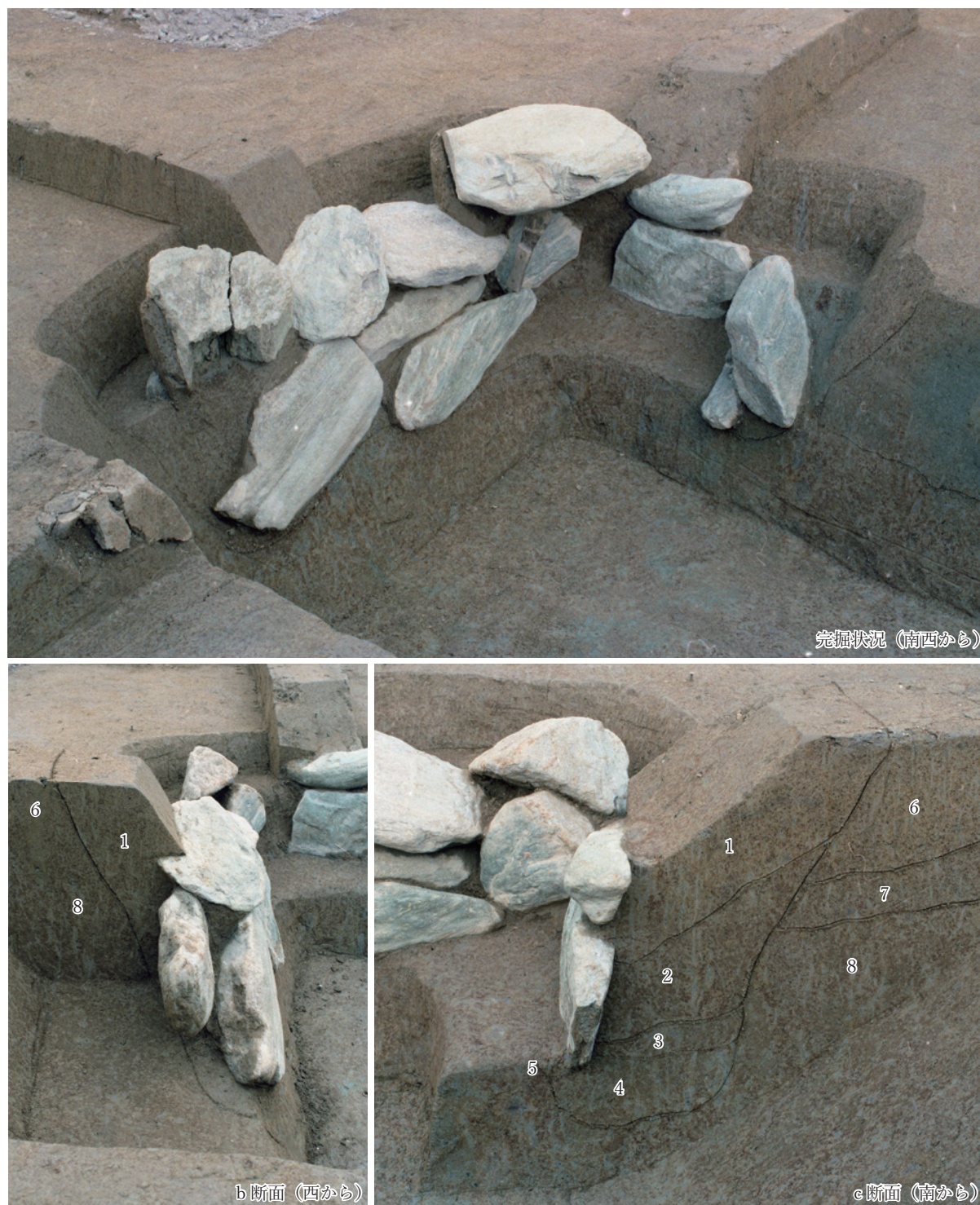


図 2-9 SX01 (3)

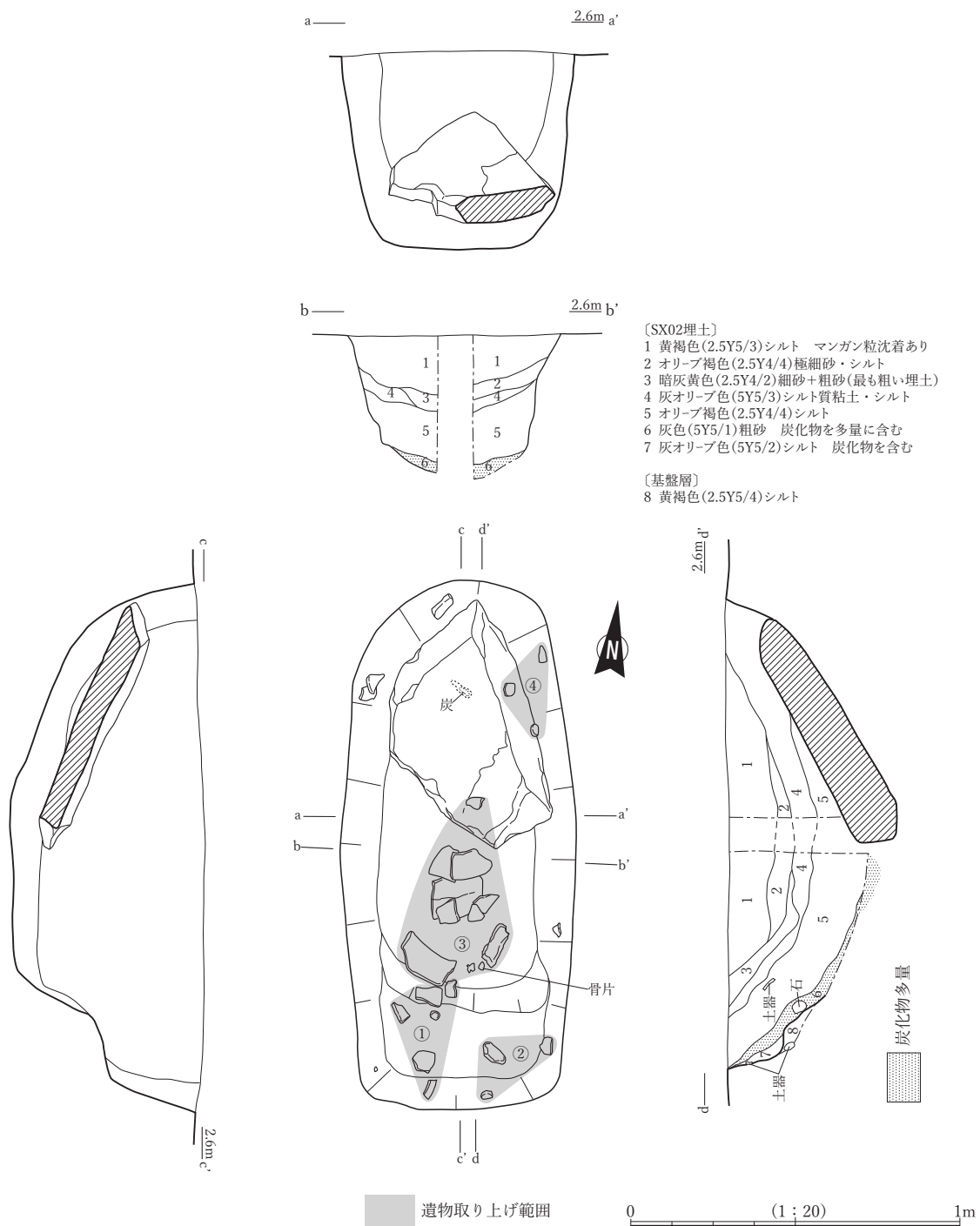


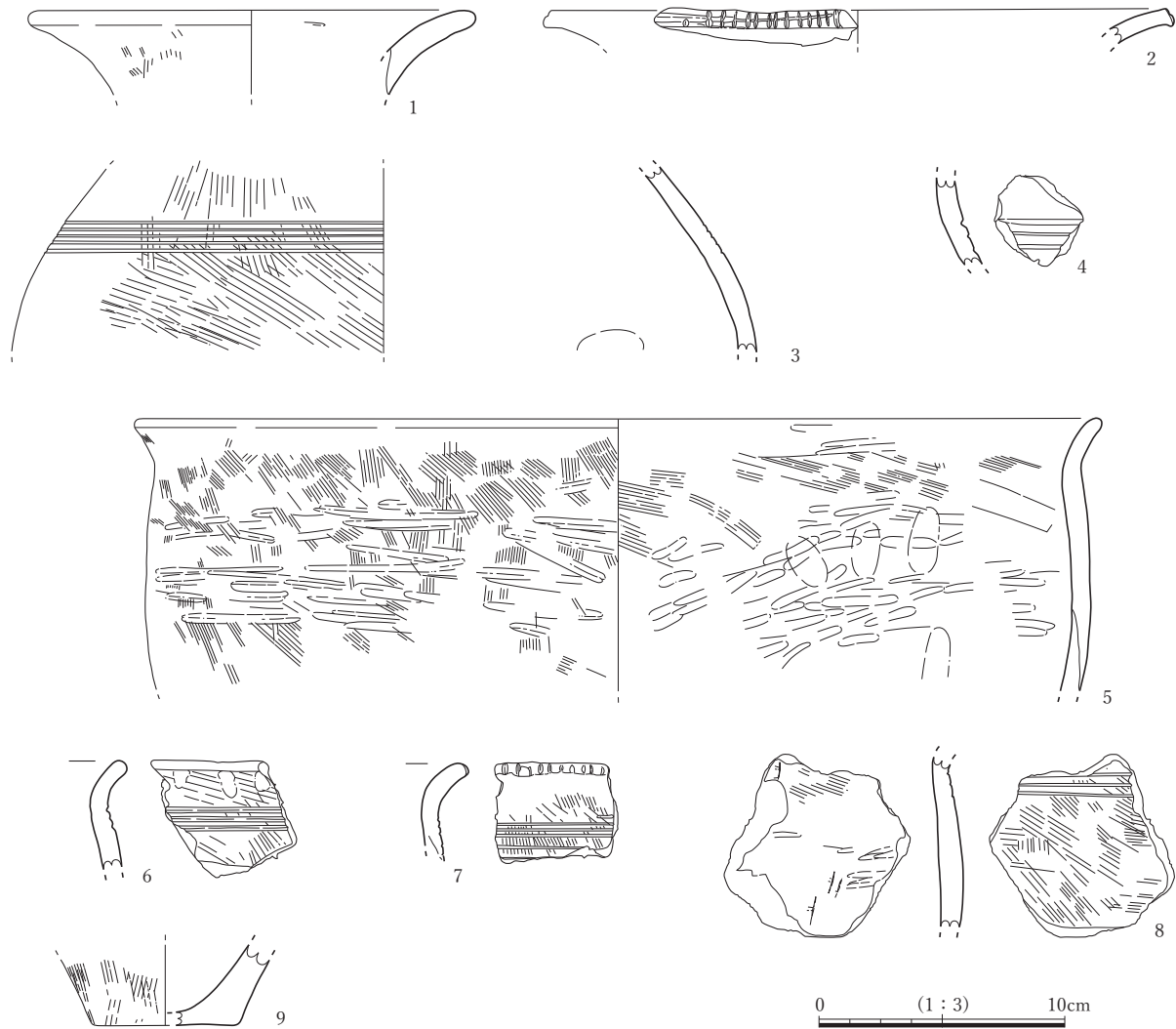
図2-10 SX02 (1)



図 2-11 SX02 (2)



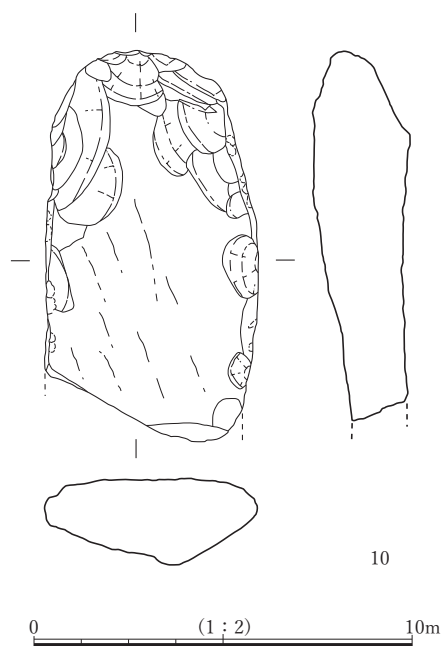
図 2-12 SX02 (3)



番号	出土位置	種類・器種	法量 (cm)			文様・調整 (外/内)	色調 (外/内)	胎土
			口径	底径	器高			
1	①	弥生土器・壺	(18.2)	-	-	刷毛目のちヨコナデ/ヨコナデ・ミガキ	7.5YR 7/6 橙 / 7.5YR 6/4 にぶい橙	微細, 石英・長石・輝石・角閃石
2	③最下層	弥生土器・壺	(25.2)	-	-	口縁端部1条の沈線に刻目, ヨコナデ・ミガキ/ヨコナデ・ミガキ	7.5YR 5/3 にぶい褐 / 7.5YR 6/4 にぶい橙	微細, 石英・長石・輝石・角閃石多量
3	③最下層	弥生土器・壺	-	-	-	刷毛目・5条の沈線/ナデ・ユビオサエ	10YR 6/4 にぶい黄橙 / 2.5Y 6/3 にぶい黄	微細, 石英・長石・輝石
4	北半部最下層	弥生土器・壺	-	-	-	ナデ・3条の沈線/ナデ	7.5YR 8/4 浅黄橙 / 10YR 7/3 にぶい黄橙	微細, 長石・輝石・角閃石多量
5	③最下層	弥生土器・甕	(39.4)	-	-	口縁部刷毛目のちヨコナデ, 胴部刷毛目のちミガキ/上部刷毛目・ミガキ, 下部ナデ・ユビオサエ・ミガキ	5YR 6/6 橙 / 10YR 7/3 にぶい黄橙	微細, 石英・長石・輝石
6	①	弥生土器・甕	-	-	-	口縁部刷毛目・ユビオサエ, 胴部3条の沈線・刷毛目・ナデ/ヨコナデ	5YR 7/6 橙 / 7.5YR 7/4 にぶい橙	微細, 石英・長石・輝石
7	北半部板石直上	弥生土器・甕	-	-	-	口縁端部刻目, 刷毛目・ナデ・6条の沈線/ヨコナデ	10YR 5/3 にぶい黄褐 / 10YR 6/3 にぶい黄橙	細, 石英・長石・輝石
8	②	弥生土器・甕	-	-	-	3条の沈線・刷毛目/刷毛目のちナデ・ミガキ	7.5YR 6/4 にぶい橙 / 5YR 6/4 にぶい橙	微細, 石英・長石・輝石・角閃石
9	北半部最下層	弥生土器・甕	-	(5.8)	-	刷毛目, 底面ナデ/ナデ	7.5YR 6/4 にぶい橙 / 7.5YR 6/4 にぶい橙	微細, 石英・長石・輝石多量

() 復元値

図 2-13 SX02 出土土器



番号	出土位置	器種	法量 (cm)			重さ (g)	石材
			長さ	幅	厚さ		
10	④	打製石斧	10.3	5.6	2.3	195	?

図 2-14 SX02 出土石器

その上で儀礼行為を行った痕跡ではないかとみられる。骨片が墓壙の南側から出土しているが、残存状態が良くないため、人骨かどうかは不確実で、部位も不明である。本遺構は、出土した土器からみて、弥生時代前期末に属するものと考えられる。

(2) 土坑

SK01-1(図 2-15 ~ 17・19・20, 表 2-1・2, 図版 1・2)

調査区の北西部で検出された土坑である。SD02 に切られ, SK01-2 を切っている。平面形は, 西側が調査区外にあり, 未検出であるため, 正確に把握できないが, 長方形であろうか。南北長は 1.68m, 東西長は検出部位で 0.66m を測る。断面形は肩から底面にかけて, 傾斜が徐々に緩くなる形態であり, 深さは 0.30m を測る。埋土は 6 層に分けられ, 1 層の攪乱を除き, シルトが主体をなしている。3 ~ 6 層は, 炭化物・土器・焼土といっ

た混入物を含んでいることで, 2 層とは大きく区別できる。底面からは 30 cm 大の石が検出された。長軸方向は N10° W である。内部からは, 弥生土器の壺・甕などの破片, 両刃石斧・石皿などの石器が出土した。本遺構は, 出土した土器からみて, 弥生時代前期末に属するものと考えられる。

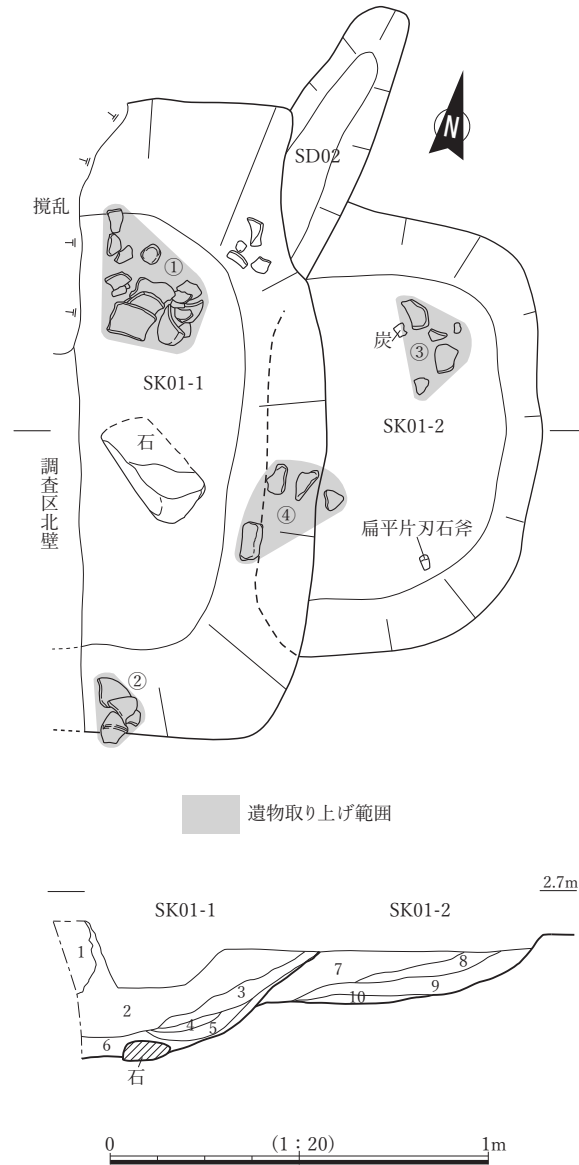
SK01-2 (図 2-15 ~ 17・19・20, 表 2-1・2, 図版 2)

調査区の北西部で検出された土坑である。SD02 と SK01-1 に切られている。平面形は西側を SK01-1 に破壊されているため, 正確にはわからないが, 隅丸方形あるいは隅丸長方形であろうか。南北長は 1.21m, 東西長は残存部位で 0.57m を測る。断面形は肩から底面にかけて, 傾斜が徐々に緩くなる形態であり, 深さは 0.19m を測る。埋土は 4 層に分けられ, シルトが主体をなしている。9 層は, 灰・炭化物からなることから, 他の層とは様相を大きく異にする。長軸方向は N11° W である。内部からは, 弥生土器の壺・甕の破片と扁平片刃石斧が出土した。本遺構は, 出土した土器からみて, 弥生時代前期中葉に属するものと考えられる。

(3) 焼土遺構

SK02 (図 2-22)

調査区中央より西側で検出された焼土遺構である。SX02 と SK01-1, SK01-2, SD02 の間に位置する。平面形は不整な五角形で, 南北長 0.70m, 東西長 0.64m を測る。南東隅を直径 5 ~ 6 cm の杭穴に切られている。断面形は極めて薄いレンズ状を呈し, 深さは 0.02m を測る。埋土は焼土と炭の 2 層からなり, 炭の上に焼土が堆積している。平面上は, 西半を焼土が, 東半を炭が占めている。遺物は出土していない。本遺構は, 検出層位からみて, 弥生時代前期中葉 ~ 末に属するものと考えられる。



〔SK01-1埋土〕

- 1 兵舎の基礎による攪乱(コンクリートバラス)
- 2 黄褐色(2.5Y5/3)シルト
- 3 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト 炭化物・土器を多量に含む
- 4 暗赤褐色(5YR3/2)細砂・焼土(砂)とシルトの混合
- 5 オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト・粘土の混合 炭化物を含む
- 6 暗褐色(7.5YR3/3)細砂・焼土(砂)の混合

〔SK01-2埋土〕

- 7 オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト マンガン粒沈着あり
- 8 暗褐色(10YR3/3)シルト 黄褐色粘土ブロックを含む
- 9 黒色(2.5Y2/1)灰・炭化物の微粒の堆積
- 10 暗オリーブ色(5Y4/3)シルト

図 2-15 SK01・SD02



図 2-16 SK01 (1)



図 2-17 SK01 (2)

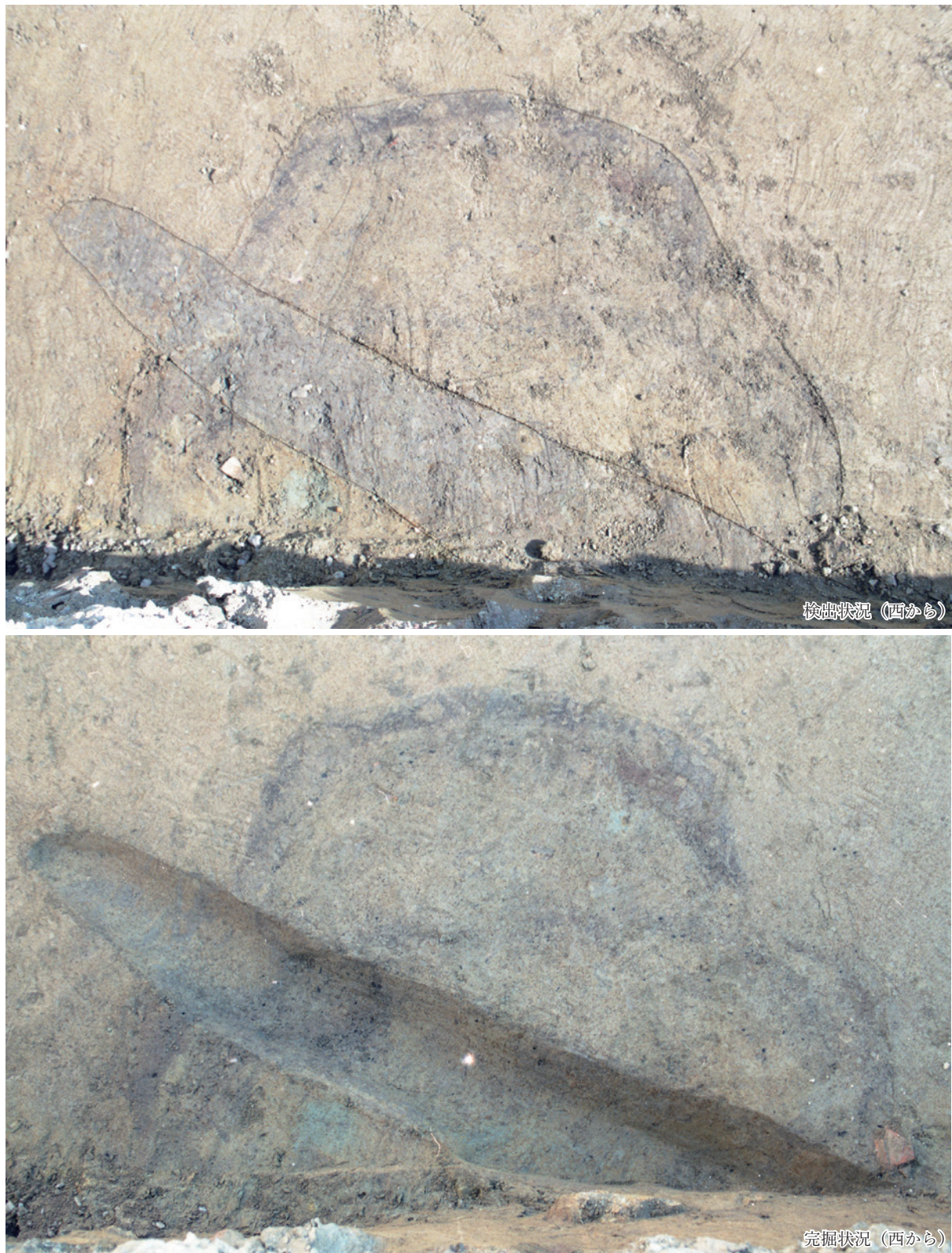


図 2-18 SD02

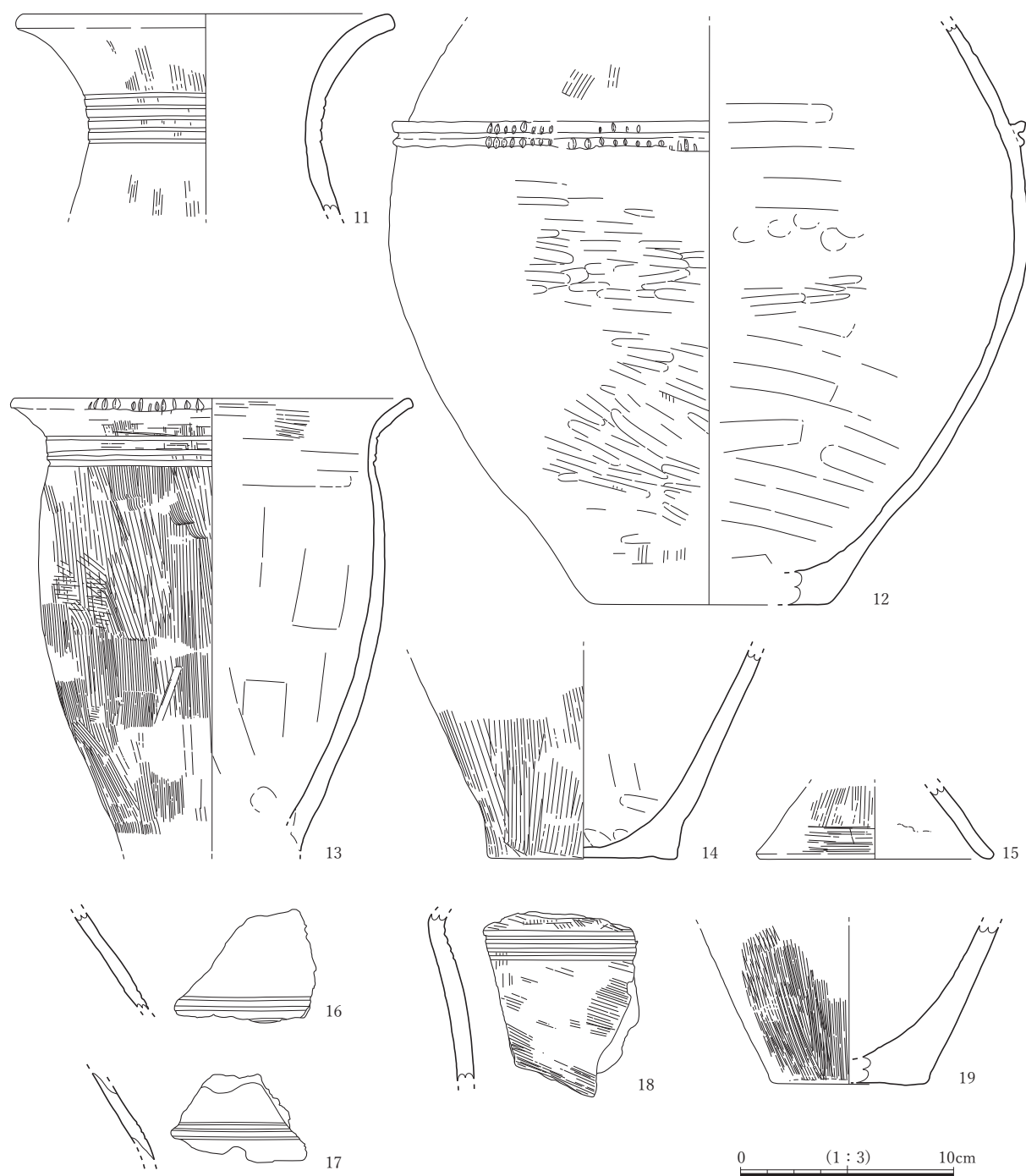


図 2-19 SK01 出土土器

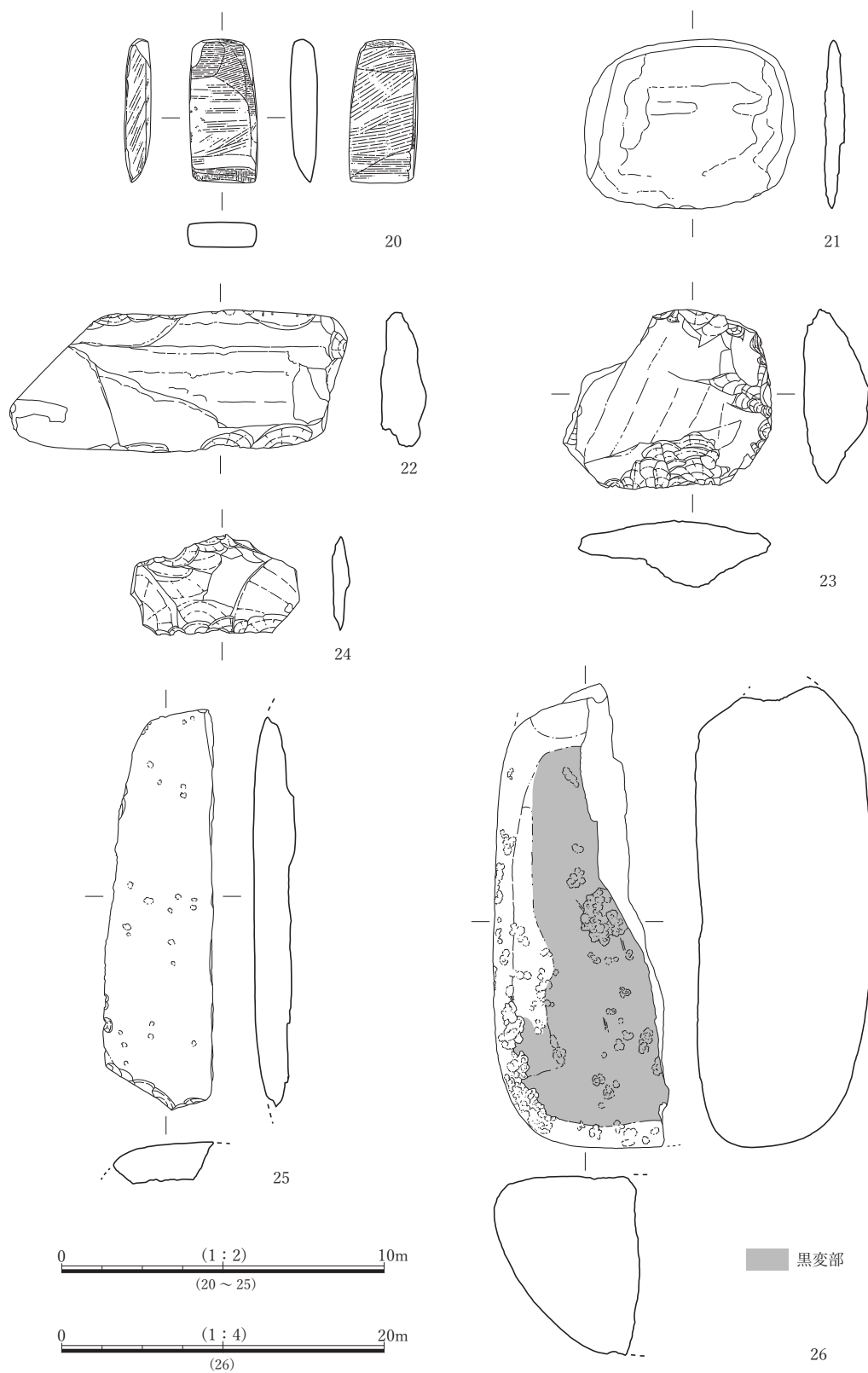


図 2-20 SK01 出土石器

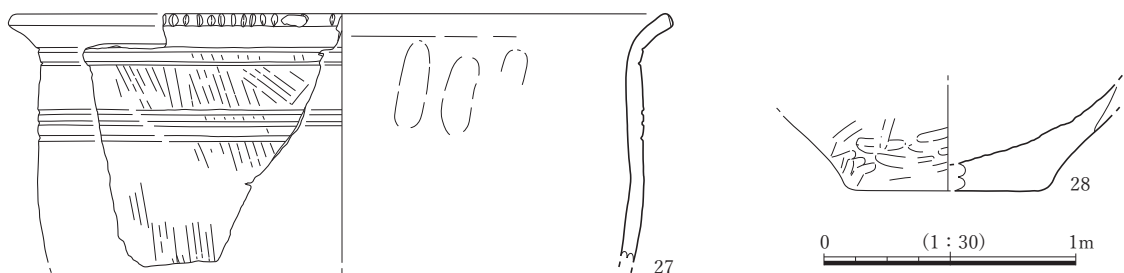
表 2-1 SK01 出土土器一覧

番号	遺構	出土位置	種類・器種	法量 (cm)			文様・調整 (外/内)	色調 (外/内)	胎土	備考
				口径	底径	器高				
11	SK01-1	①	弥生土器・壺	(17.2)	-	-	摩耗・刷毛目のちナデ、頸部5条の沈線/ナデ	5YR 6/6 橙 / 5YR 6/6 橙	微細、石英・長石・輝石多量	-
12	SK01-1	②	弥生土器・壺	-	(11.2)	-	上位剥離・刷毛目のちナデ、肩部2条の貼付突帯文に刻目・ヨコナデ、中・下位ミガキ・刷毛目痕、底面ナデ/上半ヨコナデ、中位ユビオサエ・ミガキ、下半板ナデのちナデ	5YR 7/4 にぶい橙 / 5YR 6/6 橙	微細、石英・長石・輝石	-
13	SK01-1	①・北半部	弥生土器・甕	(18.6)	-	-	口縁端部刻目、刷毛目のちヨコナデ、胴部3条の沈線/刷毛目のちヨコナデ、底部ユビオサエ	7.5YR 5/3 にぶい褐 / 7.5YR 5/3 にぶい褐	微細、長石・輝石	図面上で、沈線3条として復元
14	SK01-1	①	弥生土器・甕	-	8.9	-	刷毛目、底面ナデ/ナデ、底部ユビオサエ	7.5YR 6/3 にぶい褐 / 10YR 4/3 にぶい黄褐	微細、石英・長石・輝石	-
15	SK01	北半部	弥生土器・高坏	-	(10.8)	-	刷毛目・ヨコナデ/ヨコナデ	7.5YR 5/3 にぶい褐 / 7.5YR 6/4 にぶい橙	微細、長石・輝石・角閃石	-
16	SK01-2	④	弥生土器・壺	-	-	-	ナデのちミガキ?・3条の沈線/ナデ	7.5YR 5/4 にぶい褐 / 5YR 6/4 にぶい橙	微細、石英・長石・輝石多量	-
17	SK01-2	-	弥生土器・壺	-	-	-	板ナデのちナデ・3条の沈線/板ナデ	2.5YR 5/6 明赤褐 / 5YR 5/4 にぶい赤褐	微細、石英・長石・輝石多量	焼成後穿孔?
18	SK01-2	③	弥生土器・甕	-	-	-	摩耗・刷毛目・4条の沈線/ヨコナデ・タテナデ	7.5YR 5/3 にぶい褐 / 10YR 4/3 にぶい黄褐	微細、石英・長石・輝石多量	-
19	SK01-2	③	弥生土器・甕	-	(7.4)	-	2種類の刷毛目、底面ナデ/ナデ	10YR 5/3 にぶい黄褐 / 10YR 7/3 にぶい黄橙	微細、石英・長石・輝石多量	-

() 復元値

表 2-2 SK01 出土石器一覧

番号	遺構	出土位置	器種	法量 (cm)			重さ (g)	石材	備考
				長さ	幅	厚さ			
20	SK01-2	-	扁平片刃石斧	4.4	2.1	0.8	16.2	?	-
21	SK01-1	①	不明石器	5.2	6.5	0.6	30.43	塩基性片岩	-
22	SK01	北半部	打製石庖丁	4.3	10.25	1.4	83.43	塩基性片岩	-
23	SK01	北半部	スクレイパー	5.5	6.45	2.0	68.3	チャート	-
24	SK01-1	①	スクレイパー	3.0	5.2	0.5	8.74	サヌカイト	-
25	SK01-1	①	両刃石斧	12.35	3.35	1.3	79.24	藍閃石?	剥離(再加工か?)
26	SK01-1	-	石皿	28.6	10.5	11.0	4505	砂岩	-



番号	種類・器種	法量 (cm)			文様・調整 (外/内)	色調 (外/内)	胎土
		口径	底径	器高			
27	弥生土器・甕	(25.8)	-	-	口縁端部刻目、口縁部ヨコナデ、胴部2条と3条の沈線・刷毛目のちナデ/口縁部ヨコナデ、胴部ナデ	7.5YR 6/4 にぶい橙 / 7.5YR 6/3 にぶい褐	微細、石英・長石・輝石
28	弥生土器・壺	-	(8.0)	-	ミガキ、底面ナデ/剥離	7.5YR 7/3 にぶい橙 / 7.5YR 8/4 浅黄橙	微細、石英・長石・輝石・角閃石多量

() 復元値

図 2-21 SD02 出土土器

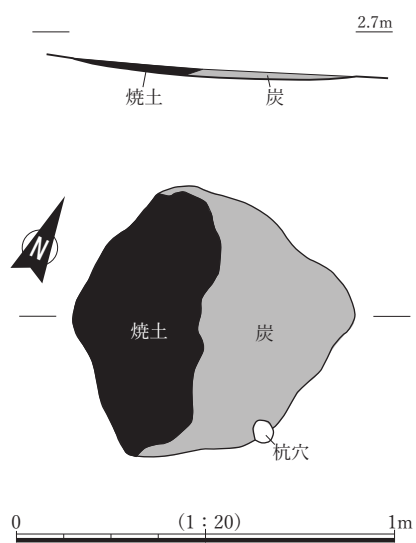


図 2-22 SK02

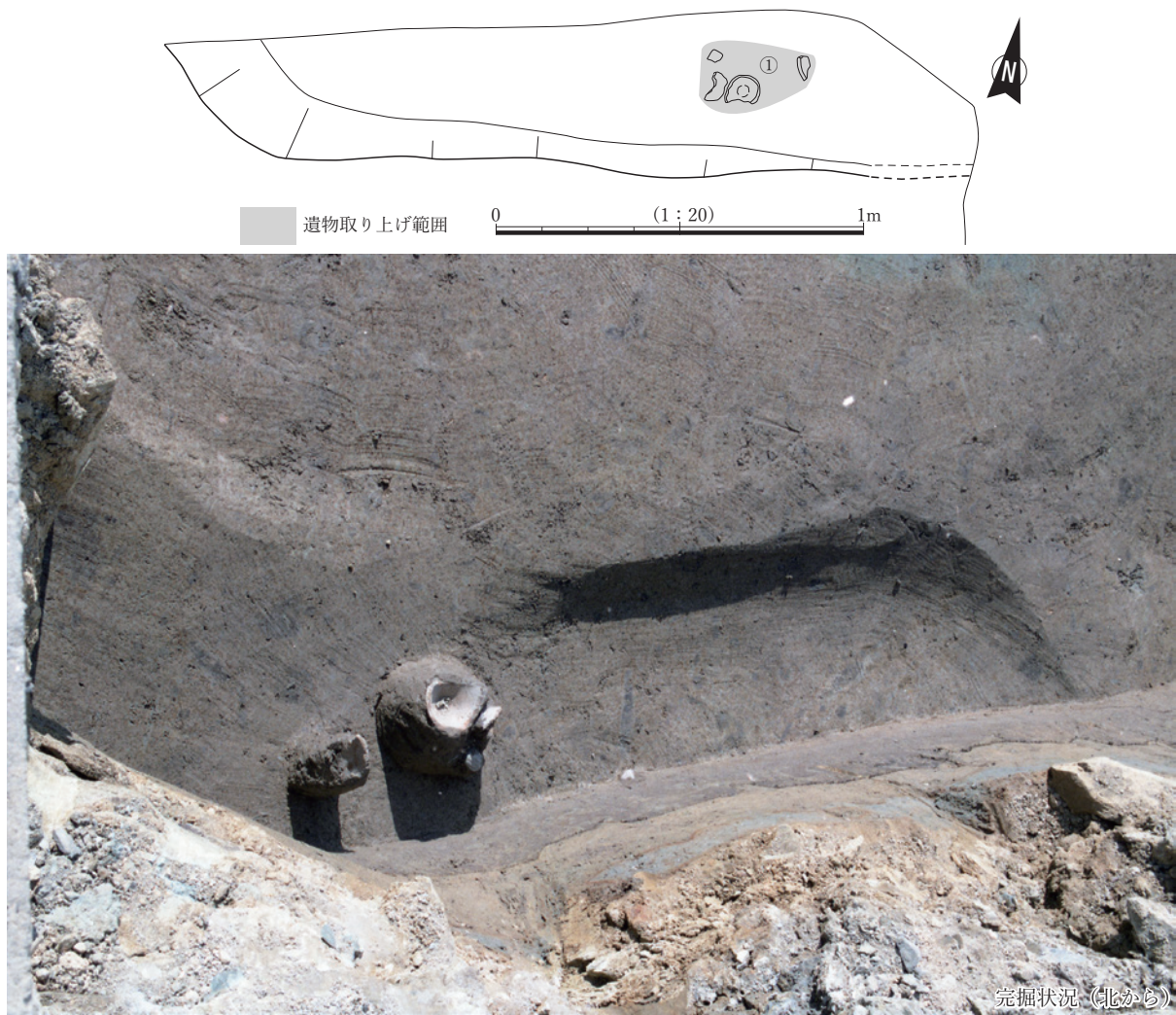
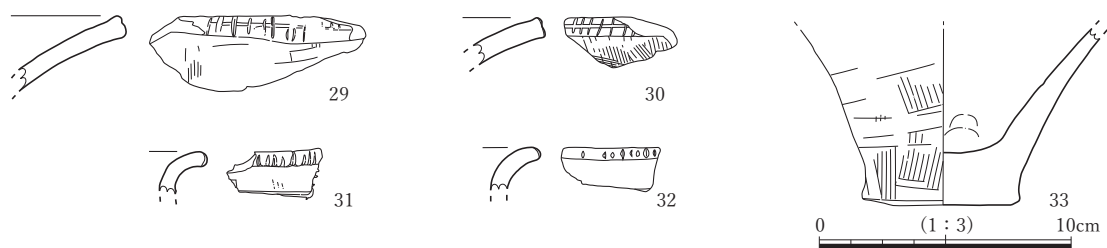


図 2-23 SD01



番号	出土位置	種類・器種	法量 (cm)			文様・調整 (外/内)	色調 (外/内)	胎土
			口径	底径	器高			
29	①	弥生土器・壺	-	-	-	口縁端部1条の沈線に刻目、刷毛目のちナデ/ナデ	10YR 6/3 にぶい黄橙/ 7.5YR 6/3 にぶい褐	微細、石英・長石・ 輝石
30	-	弥生土器・壺	-	-	-	口縁端部1条の沈線に刻目、刷毛目のちナデ/ナデ	7.5YR 7/4 にぶい橙/7.5YR 7/4 にぶい橙	微細、長石・輝石 少量
31	-	弥生土器・甕	-	-	-	口縁端部刻目、刷毛目のちヨコナデ、1条の沈線/ヨコナデ	10YR 6/3 にぶい黄橙/ 10YR 6/3 にぶい黄橙	微細、石英・長石・ 輝石・角閃石
32	-	弥生土器・甕	-	-	-	口縁端部刻目、ヨコナデ、1条の沈線/ナデ	10YR 6/3 にぶい黄橙/ 10YR 6/3 にぶい黄橙	微細、石英・長石・ 輝石・角閃石
33	①	弥生土器・甕	-	6.3	-	刷毛目のちナデ、底面ナデ・剥離/ナデ、底部一部ユビオサエ	5YR 6/6 橙/5YR 7/4 にぶい 橙	微細、石英・長石・ 輝石多量

図 2-24 SD01 出土土器

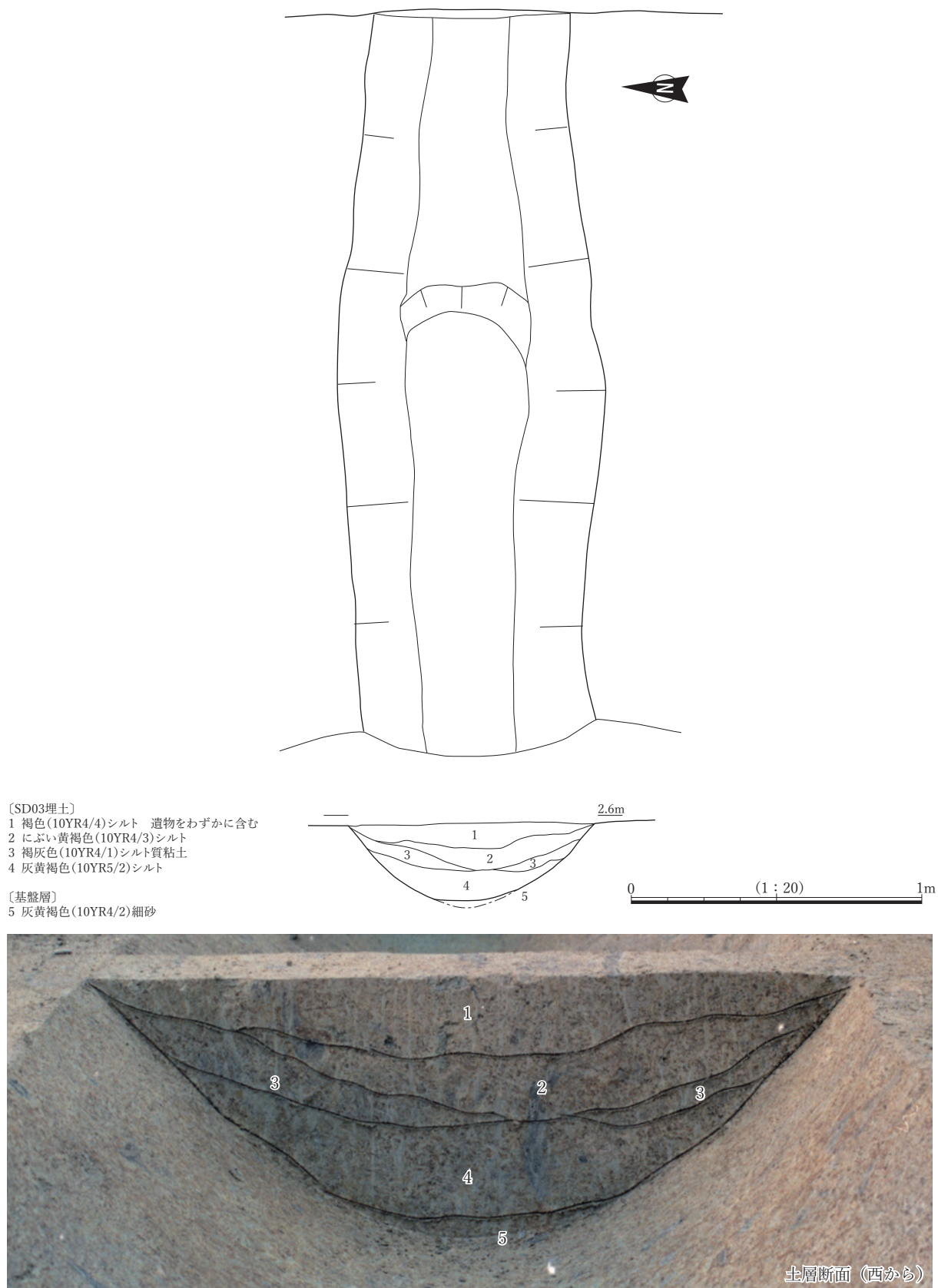
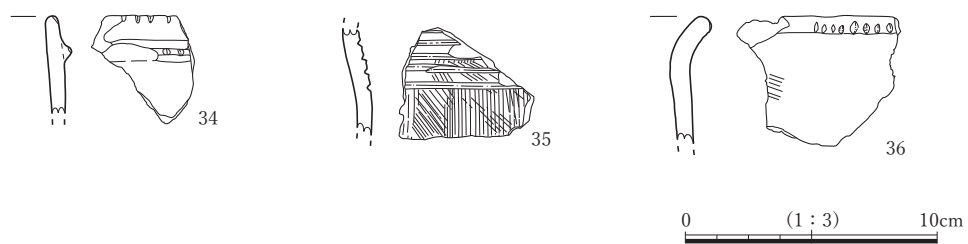


図 2-25 SD03 (1)

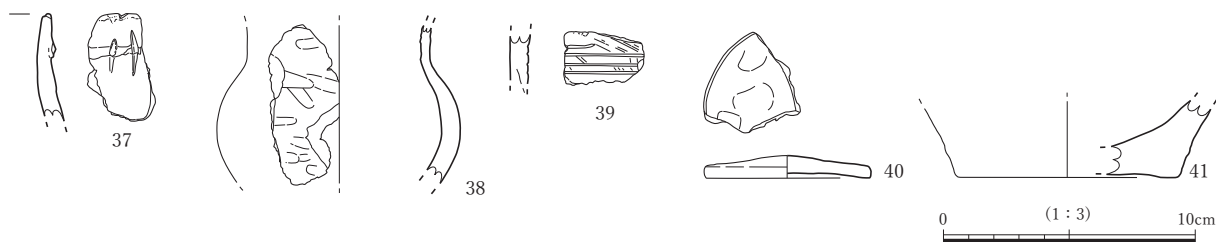


図 2-26 SD03 (2)



番号	種類・器種	文様・調整（外／内）	色調（外／内）	胎土
34	縄文土器・深鉢	口縁端部刻目、ヨコナデ・貼付突帯文に刻目・ナデ／ナデ	10YR 5/2 灰黄褐／7.5YR 5/4 に ぶい褐	微細、石英・長石・輝石多量
35	弥生土器・甕	5条の沈線・刷毛目・ナデ／ナデ	5Y 2/1 黒／2.5Y 4/2 暗灰黄	微細、石英・長石・輝石
36	弥生土器・甕	口縁端部刻目、摩耗・刷毛目のちナ デ？／ナデ	7.5YR 7/6 橙／7.5YR 8/6 浅黄橙	微細、石英・長石・輝石・角閃 石多量

図 2-27 SD03 出土土器



番号	種類・器種	法量 (cm)			文様・調整 (外/内)	色調 (外/内)	胎土	層位
		口径	底径	器高				
37	縄文土器・深鉢	-	-	-	口縁端部刻目、ナデ・1条の貼付突帯文に刻目/ナデ	5YR 5/4 にぶい赤褐 / 5YR 6/6 橙	微細、長石・輝石・角閃石多量	4層最下部
38	弥生土器・壺	-	-	-	ナデ・ミガキ/剥離・ナデ・ユビオサエ	5YR 5/6 明赤褐 / 10YR 4/1 褐灰	微細、石英・長石多量	4層下面
39	弥生土器・甕?	-	-	-	刷毛目・ナデ・4条の沈線/ナデ	10YR 5/2 灰黄褐 / 2.5Y 7/2 灰黄	微細、長石・輝石	4層
40	弥生土器・蓋	-	(6.6)	-	ナデ・ユビオサエ/ナデ・ミガキ	10YR 7/4 にぶい黄橙 / 10YR 6/4 にぶい黄橙	微細、石英・長石・輝石・角閃石多量	4・5層
41	弥生土器・甕	-	(8.8)	-	ナデ・板ナデ/ナデ	7.5YR 5/3 にぶい褐 / 10YR 7/3 にぶい黄橙	微細、長石・輝石・角閃石多量	4層

() 復元値

図 2-28 包含層出土土器

(4) 溝

SD01 (図 2-3・4・23・24, 図版 3)

調査区の北東隅で検出された溝である。幅は検出部位で 0.45 m、深さは調査区東壁で 0.26m を測り、東西に 2.20 m 分検出された。埋土は黒褐色シルトの単層からなる。内部からは弥生土器片が出土した。本遺構は、出土遺物からみて、弥生時代前期末に属するものと考えられる。

SD02 (図 2-15・18・21, 図版 3)

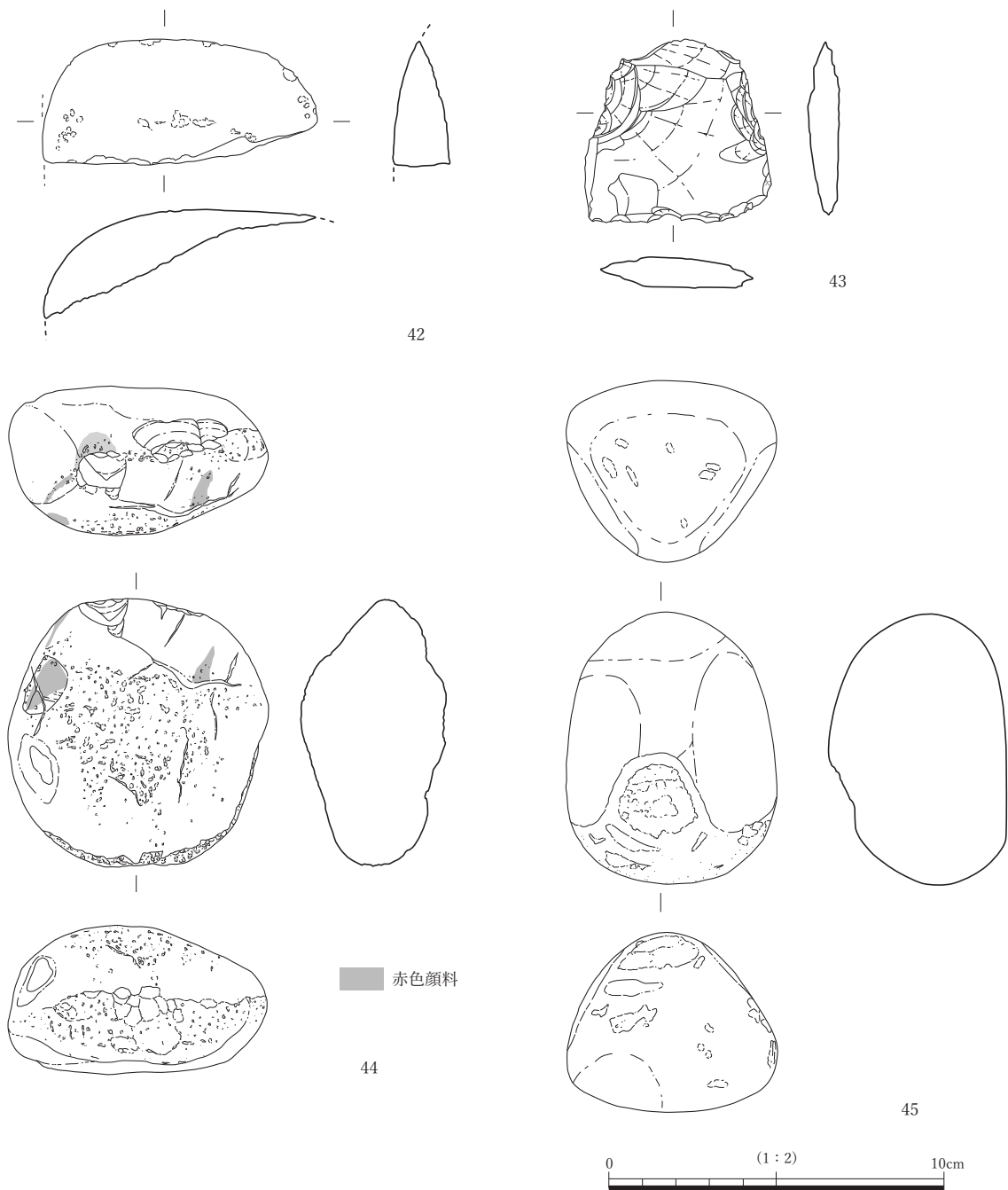
調査区の北西部で検出された溝である。SK01-1 と SK01-2 を切っている。幅 0.24 m、深さ 0.13m を測り、南北に 2.08 m 分検出された。内部からは弥生土器片が出土した。本遺構は、出土遺物からみて、弥生時代前期末に属するものと考えられる。

SD03 (図 2-25 ~ 27, 図版 3)

調査区の南東部で検出された溝である。西側を攪乱によって破壊されている。幅 0.93 m、深さ 0.27m を測り、東西に 2.57 m 分検出された。底面は東から西に向かう途中で一段下がっている。このことから、溝の機能時、水は東から西へと流れていたものと推定される。断面形はレンズ形を呈する。埋土は 4 層に分けられ、シルトが主体をなしている。内部からは弥生土器片に加え、刻目突帯文土器片も出土した。本遺構は、出土遺物からみて、弥生時代前期末には埋没したものと考えられる。

3. 包含層出土遺物

包含層からは、土器・石器が出土した (図 2-28・29, 図版 3)。土器には、刻目突帯文土器、弥生土器の壺、蓋、底部などがある。37 は刻目突帯文土器の口縁部片である。弥生時代前期前葉に属する。38 は弥生土器の小形の壺である。時期決定は難しい。39 は弥生土器の小片である。器種は甕である。



番号	器種	法量 (cm)			重さ (g)	石材	備考	層位
		長さ	幅	厚さ				
42	石皿	3.7	8.1	1.7	58.09	砂岩	-	4層
43	スクレイパー	5.5	5.6	0.9	33.38	サヌカイト	-	4層
44	敲石	7.9	7.7	4.3	350	石英	磨り痕に赤色顔料付着, 裏面剥離・敲打痕	4層下半部
45	磨石	8.1	6.3	5.3	375	?	-	4層下半部

図 2-29 包含層出土石器

うか。40 は蓋である。小形壺用であろうか。これらは4～5層からの出土である。石器には、石皿、スクレイパー、敲石、磨石がある。42 は小片ではあるが、石皿と判断した。石材は砂岩である。43 はスクレイパーである。石材はサヌカイトである。44 は敲石である。石材は石英で、赤色顔料が付着している。45 は磨石である。いずれも4層からの出土である。

(端野晋平)

文献

北條芳隆 (編), 1998. 庄・蔵本遺跡1: 蔵本キャンパスにおける発掘調査. 徳島大学埋蔵文化財調査室.
橋本達也, 2001. 弥生時代前期朝鮮系無文土器の展開と徳島. 青山考古 18, 167-176